

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ（留学目的）		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
99-011	インド村落社会における職人カースト諸集団に関する文化人類学的研究		
	インド	The Ramakrishna Mission Institute of Culture	2000.6 ~
	関根光宏	立教大学大学院	院生博士

研究テーマ（留学目的）の説明（助成決定時のテーマ。文責は本人）

人類学者による本格的な現地調査が始められた1950年代以降、インド社会研究の中心的課題はカースト研究におかれていた。なかでも人類学者が特に注目したのは、カースト間のヒエラルキーをめぐる問題である。ここでは、バラモンを頂点とする階層秩序を有するカースト制度こそがインド社会の基礎にあり核となるものであるという前提のもとに、そのヒエラルキーを基礎付けるものがなんであるかについての議論が行われてきた。特に大きな影響を有していたのが、カースト制度の基礎には「浄・不浄」のヒエラルカルな対立があるとするルイ・デュモンのカースト論（1966）であり、議論の流れはこの論を軸に行われてきた。

しかしながら近年の研究では、従来の研究における問題点として次の2点が指摘され、それによってインド社会の正確な理解が妨げられてきたことが明らかにされている。第一に、サンスクリット古典籍にみられるインド社会像（特にヴァルナの観念）の偏重によって、「浄・不浄」以外の価値観が無視されていたこと。第二に、インド社会の歴史的变化、特に植民地の変容が軽視されていたことである。今日、インド社会研究の人類学的アプローチにおける中心的課題は、「浄・不浄」をも含めた多面的な価値観への注目、および歴史的視点の導入によって、その実像を離れて捉えられてしまったインド社会を捉え直そうとする試みであるということができる。こうした流れのなかで最近の議論の中心となっているのは、ヒンドゥー社会において社会的上層階層に属するバラモンの役割と位置付け、および社会的下層階層に属する「不可触民」の位置付けについてである。これらが伝統的王権構造やケガレと関わる価値観との関連で論じられている。

一方で、社会的階層の上で中位から最下層に位置するサービス・カースト諸集団（カーストの名称や属性が、職業としての特定の手工業やサービス業と結びついている諸カースト）の役割と位置付けについては、「浄・不浄」をも含めた多面的な価値観への注目、および歴史的視点を導入することによって考察が未だ充分に行われていない領域であるということができる。特に、私がこれまで研究を進めてきた技術職を属性とする職人カーストについては、その具体的実態が村落調査に基づいて十分に解明されているとはいえず、そこに源を持つ価値とエネルギーを掘り起こしうる可能性が充分残されていると考えられる。

以上のような事情を鑑みて本研究は、近年の人類学的議論において取り上げられている多面的な価値観に注目し、また歴史的視点をも導入することによって、村落社会の中で職人カースト諸集団が果たす役割と位置付けを村落における現地調査と文献調査の両面から明らかにしようとするものである。

進捗状況報告（半期毎の報告。文責は本人。表示されていない場合は未収録）

報告日：2001年1月25日

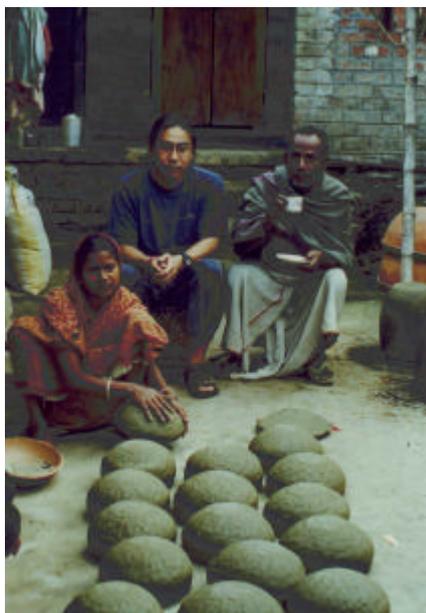
「インド村落社会における職人カースト諸集団に関する文化人類学的研究」を研究テーマとして、2000年7月からインド西ベンガル州カルカッタのThe Ramakrishna Mission Institute of Culture に留学中である。

留学開始から2000年12月までは、主として、留学先機関に付属の語学学校において、今後の調査・研究活動に不可欠なベンガル語の習得に力を傾けた。また同時に、今回の研究テーマの基礎的資料となる短期間の文化人類学的調査を繰り返してきた、西ベンガル州ブルボ・ゴパルノゴル村にも数度滞在し、補足調査を行った。さらに、カルカッタを中心に、ベンガルにおける職人カースト諸集団を含めた中間カースト集団に関する、文献資料の収集も精力的に行った。

2001年1月からは、引き続き留学先機関においてベンガル語の習得に力を注ぐと共に、本年中に開始を予定している村落における住み込み調査に向けて、調査地の選定を行うべく西ベンガル州内の村落の視察を開始した。本年前半期はこれらの作業を続け、住み込み調査に向けて万全の準備を行うとともに、収集した文献の分析作業も同時に行っていくつもりである。

健康状態に関しては、時に当地特有の下痢症状にみまわれることがあるものの、おおむね良好である。また、本年1月に当国グジャラート州で大地震が発生したが、留学先である西ベンガル州においてはその影響はまったくなく、研究活動に専念することが可能となっている。

滞在先に関しては、当初、留学先研究機関の寮に移ることを考えていたが、研究環境を考慮し、渡印当初の滞在先に引き続き滞在している。



<研究成果報告書>

報告者 : 関根 光宏 (助成番号 99-011)
留学先国名 : India
機関名 : The Ramakrishna Mission Institute of Culture
研究テーマ : 「インド村落社会における職人カースト諸集団に関する文化人類学的研究」

(記入日 : 2002年7月20日)

おかげさまで、2002年7月第1週をもって、貴財団「松下アジアスカラシップ」による2年間のインド留学期間(2000年6月末～)を無事終了することができました。

なによりもまず、今回の助成決定以来、留学準備期間から現在にいたるまで、様々な面で心のこもったご支援をいただきました貴財団ならびに貴財団スタッフの皆様にご心からのお礼を申し上げたいと思います。半年ごとの研究進捗状況や会計の報告に際してメールを通じて励ましの言葉をいただきましたこと、当地の通信事情の悪さや研究スケジュールの関係でこちらからの連絡が遅れた際にご理解をいただくとともに様々な便宜を図っていただきましたこと、等々、いずれも2年間研究を遂行していくにあたって欠かせぬものでした。本当に有難うございました。

さて、「インド村落社会における職人カースト諸集団に関する文化人類学的研究」を研究テーマとして行なった、今回の研究の経緯・経過についてご報告させていただきます。

今回の研究は、それに先立って立教大学大学院文学研究科に提出された修士学位論文「インド、西ベンガル州のクモル(土器づくりジャーティ)——南チョッピシュ・ポルゴナ県、プルボ・ゴパルノゴル村の事例から」の研究を引き継ぎ、それをさらに発展させて博士学位を執筆するための調査期間という位置付けで行なわれました。

2002年6月末に日本を出発し、7月第1週から始まった留学期間は、大きく分けて、①ベンガル語の学習期間、②カルカッタ近郊の調査村落におけるフィールドワークの期間に分けられました。

①ベンガル語の習得： 報告者は留学開始前に日本において、バングラデシュ人教師による1年間のベンガル語訓練を受けていましたが、フィールドワークにおけるコミュニケーション能力をさらに高めるべく、2000年7月から2001年6月の1年間、カルカッタ市内にあるThe Ramakrishna Mission Institute of Culture--School of Languagesのベンガル語コースを履修しました。

コースは前期（Junior Course：2000年7月～12月）と後期（Senior Course：2001年1月～6月）に分けられ、前期は主としてベンガル語の基礎的文法の学習（英語による授業）およびベンガル語文献購読、後期はベンガル語による授業に切り替わり、より高度な文法の習得と文献の購読が行なわれました。これらによって日常生活をする上で支障のないベンガル語能力、および調査村落における参与観察を中心としたフィールドワークに必要な語学能力の獲得に努めました。両コースとも、コース修了試験を経て成績証明書を得ました。

また、2001年3月には、同校のコンヴェンション・セレモニー（Vivekananda Hall, The Ramakrishna Mission）において、ベンガル語コースの代表に選ばれ、ベンガル語によって留学の経緯について発表をすると同時に、ベンガル語テレビ局によるインタビューも受けました。

ベンガル語学習に関してはさらに、プライベートのチューターのもとに通うとともに、調査村落における予備調査期間中も努めて継続した学習を心がけ、これは留学期間中の2年間を通じて行なわれました。

以上の作業によって、新聞・雑誌等を辞書なしで難なく読みこなすという作業には未だ達していませんが、読み書き能力、さらに日常生活および調査研究活動に必要なコミュニケーション能力を獲得することはある程度できたのではないかと自負しています。

②フィールドワーク： 調査地に選定した西ベンガル州チョッビシュ・ポルゴナ県プルボ・ゴパルノゴル村（以下、P村）でのフィールドワーク。

上記語学学校に通っていた最初の1年間は、今回の研究の基礎的資料を得るための予備

調査期間として位置付け、短期間の滞在を繰り返して、被調査者との信頼関係の構築に努めると同時に村落に関する基礎的情報の収集を行ないました。

またこの期間中は、部屋を借りているカルカッタを基点として、調査村落のある西ベンガル州の、他の地域の事情を把握するため、折にふれて西ベンガル州各地に調査旅行に出かけました。さらに、当国の首都デリーにも2度ほど出かけ、資料収集を行ないました。

当初の計画では、ベンガル語コースが修了する2001年7月から、数回に分けて長期の調査に入る予定でしたが、ビザ関係の事務を行なう外国人登録局に併設されている、セキュリティー・コントロール（警察の一部門）による謂れのないハラスメント（主として金銭目当て）をたびたび受け、郵便物が紛失するなどの被害があったため、在カルカッタ日本国総領事館と相談のうえ一度に長期間の調査を控えるようにして比較的短期の調査に切り替え、それを繰り返すことによってフィールドワークを続けてきました。

留学期間中に行なったフィールドワークにおいては、研究計画に記した、「村落における現地調査と文献調査の両面から、インド村落社会のなかにおける職人カースト集団が果たす役割と位置付けを明らかに」し、最終的にはP村で土器製作をその伝統的職業としているクモル(クマル)・カーストに関する民族誌を書くという目的のもと、以下のような作業を行ないました。

まず、調査村落の基礎的情報としての社会構造の把握。このために、村の地理的背景、カースト構成とその関係、親族関係の構造などの調査を行ないました。

フィールドワークを行なったP村の概況について、以下、紙面の都合上ごく簡単に箇条書きのかたちで述べます。

- ・P村は西ベンガル州南部チョッビシュ・ポルゴナ県に位置し、世帯数441世帯、人口2,556人を持つ水田稲作の村である。

- ・P村と西ベンガル州の州都カルカッタ（正式名コルカタ Kolkata）とは50キロメートルほどの距離であり、村の中心から東方2キロメートルほどのところにある鉄道駅まで徒歩とリキシャで30分ほどかけて出れば、カルカッタとは鉄道およびバスで結ばれている。毎日の通勤も可能である。

- ・P村はクモルをはじめマヒッシュョ、ポド、カオラ、ムチ、ブラフモン、シェグラ、ゴアラ、カヨスト、ナピト、カマルの11のカーストによって構成されている。水田に囲まれた集村に11のカーストが、それぞれパラ（集落）をなして居住している。

村の概況の把握の次には、クモル・カーストの生業・社会組織・人生儀礼等を明らかに

するためのインタビューを繰り返しました。以下もごく簡単に箇条書きのかたちで触れます。

- ・クモル・カーストは、先にも述べたように土器製作をその伝統的職業とするカーストであり、世帯数は 21、構成員総数は 114 人を数える。(フィールドワークに際しては、このクモル・カーストのうちのひとつの世帯に滞在して参与観察を行なった。)

- ・クモル・カーストに属する世帯は、現在でも 18 世帯が土器製作に従事しており、それを主たる現金収入源としている。

- ・また、そのほとんどの世帯が、15 カタ (約 0.25 エーカー) から 8 ビガ (約 2.64 エーカー) の耕地を所有して稲作を行なっている。収穫された米は基本的に自家消費用である。

あまりに簡単に触れましたが、以上のような作業をとおして、村の社会構造を理解し、クモル・カーストに関しての民族誌を記すための一次資料の収集作業を留学期間中を通して行なってきました。

また、これらと並行して留学期間後期からは、留学期間終了後に引き続き調査地に滞在して集中的に行なう予定であった、ライフヒストリー (生活史) 調査に関する準備も進めてきました。留学期間が終了した現在、この作業を重点的に進めています。これは、参与観察によるフィールドワークにおいて収集した情報とともに、今回の留学の成果をその一部として含む博士論文をまとめる際に大きな柱となるものです。今のところ、調査村のクモル (土器職人) の一人を選んで集中的に話を聞き、それをカセットテープに録音して文字起こす作業を行なっています。同時に分析編集作業を行ない、これによって、本年度末には一編の土器職人のライフヒストリーを提示することが可能かと考えております。

③その他： 留学期間中、短期間ではあるが、東海大学文学部小磯講師の依頼によって、カルカッタ市内および調査村落において、主としてヒンドゥー教徒が用いる護符等の収集、ならびに、ヒンドゥー教の各種儀礼等の写真撮影を行ないました。このことは今回の留学の目的と直に関わるといえるものではありませんが、留学地であるカルカッタと調査村落における活動であり、また研究と並行してその合い間に行なわれ、結果的に村落の生活をより深く理解し、研究目的を達成するために役立つことになったのでここに付記いたします。その成果は、『インド・日々の祈り展』(東海大学文学部展示室、2002 年 9 月下旬～10

月上旬予定) において展示される予定です。

報告者は、2年間の助成期間終了後の7月以降も引き続いてインド滞在を続けおり、現在の予定では2002年度末に日本に帰国の予定です。なお、今回の留学の直接の成果は、2003年11月に立教大学大学院文学研究科に提出予定の博士学位論文の一部として提出される予定です。

今後も、今回の留学経験を生かして、貴財団の「わが国と諸外国との国際相互理解を増進するとともに、これに資する国際人の養成を通じて世界文化の進展と人類の平和に貢献すること」という目的に貢献できるよう、研究活動を継続してまいりたいとおもっております。

以上。

調査村の子供たちと共に。

